

琉球大学学術リポジトリ

てだがあなの王宮：沖縄の墓と王陵の思想

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学国際沖縄研究所 公開日: 2016-05-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安里, 進, Asato, Susumu メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/33965

てだがあなの王宮
——沖繩の墓と王陵の思想——

安 里 進*

Royal Palace “Teda-ga-Ana”:
The Concept of Okinawan Tombs and the Royal Tombs

ASATO Susumu

Okinawan traditional tombs evolved from hillside caves to the more recent house-shaped tombs above the ground. The ossuary is called “Jiish,” for the bones are also shaped like a house. Why were tombs originally caves and why did they evolve into house-shaped tombs? Furthermore, why are ossuaria shaped like houses? In addition, does it have any meaning that most tombs are plastered in white? This paper attempts to answer these archaeological questions about Okinawan tombs and ossuaria by showing their connection with Ryukyuan royal tombs. In short, the author considers that “Nirai-kanai,” an image of the white world, and “Teda-ga-Ana” (Sun’s Hole), the Royal palace built in the other world, to be the basis for the conceptualization of Okinawan tombs, including the Royal tombs.

はじめに

沖繩には、いろいろな形の墓と蔵骨器がある。家形の墓、自然の洞窟を墓室にした墓、南中国から伝わって沖繩化した亀甲墓などがある。洗骨した遺骨を納める厨子（ジーシ）と呼ばれる蔵骨器も、板製、石製、陶製のほか、豪華な御殿形から簡素な甕形まであり、大きさも大小あって実にさまざまだ。

多種多様にみえる沖繩の墓や厨子だが、建物形という基本原則がある。古琉球以後の沖繩の墓は、洞穴墓から建物形へと発達したが、洞穴墓の内部にも木造建物が建てられていた。厨子の形も 13 世紀から現代まで、洗骨・火葬骨を問わず一貫して建物形である。そして墓を漆喰で白化粧することも基本原則の一つである。

なぜ、洞窟内に墓が造られ、建物形へと発達したのか、なぜ厨子も建物形なのか。そ

* 沖縄県立芸術大学教授 Professor, Okinawa Prefectural University of Arts

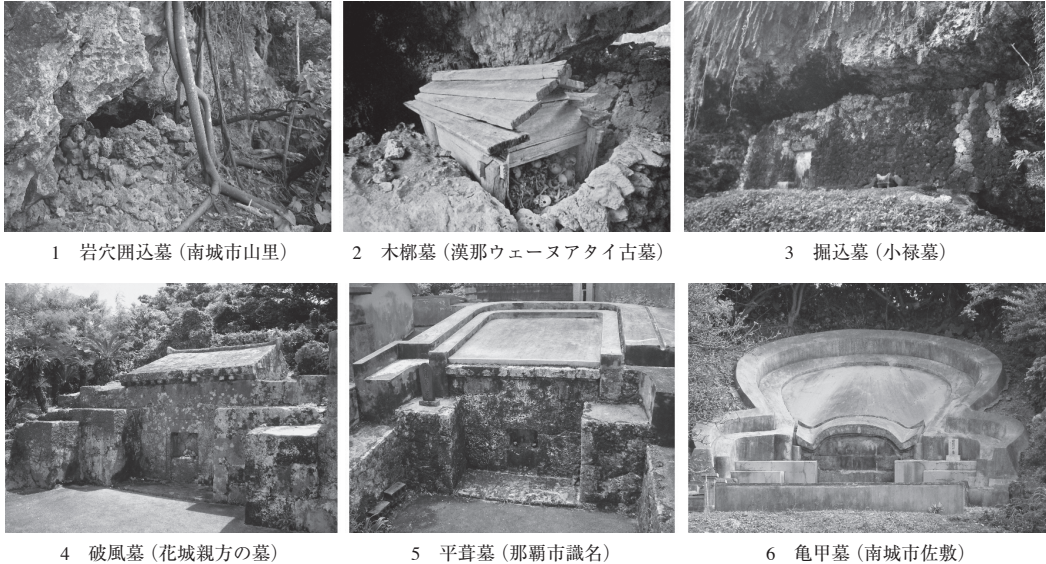


図1 沖縄にはさまざまな形の墓がある

して、なぜ漆喰化粧されたのか。本稿では、沖縄の墓をめぐる問題を、考古学的視点に立って琉球王国中山王陵との関係から分析する。沖縄の墓と王陵の向こうに見えるのは、「白い世界」としてイメージされた他界(ニライカナイ)と、そこにある「てだがあな」(太陽の穴)に建立された王の宮殿である。

1. 墓と王陵の分類

1-1 墓の分類と木槨墓の設定

本稿では、沖縄(沖縄島と周辺離島)の伝統的な墓と王陵を扱う。沖縄の墓と厨子をめぐらる問題を王陵から考えていくために、まず、王陵が沖縄の墓と厨子の祖型でありモデルだったことから論じたい。

沖縄の墓の形態については、民俗学的関心から分類されてきた。ここでは、名嘉真宜勝[名嘉真 1972]と平敷令治[平敷 1995: pp. 271-275]の分類を中心に沖縄の主な墓の型式について紹介する。

まず墓室の造営方法によって横穴式と平地式に大別されている。横穴式は、自然洞窟や岩穴を利用した洞穴型、崖や丘に横穴を掘った掘込型、掘込型の外観を建物形に仕上げた家型に分類される。洞穴型の墓は、崖葬墓とよばれているが、自然の洞窟や岩穴をそのまま利用したものを洞穴墓(岩穴墓)、洞穴や岩穴の正面や側面を石積で囲ったものは岩穴囲込墓(岩かけ墓)に区別されている。掘込型の墓室を石積で塞いだものを掘込墓(掘り抜き墓、掘取墓)とよぶ。とくに高い崖の中腹に横穴を掘った墓は壁龕墓という。掘込型の墓室を板で塞いで板戸をつけた墓は板門墓[伊波 1961: pp. 321-326、小川 1987:

pp. 217-218] とよばれている。家型には、掘込墓の外観を切妻破風屋根にした破風墓と片流れ屋根にした平葺墓、そして亀甲墓がある。平地式の家型には、横穴を掘らずに地上に石造建物を構築した平地破風墓と平地平葺墓がある。平地式の亀甲墓もある [金城 1982: pp. 26-35]。

このほか、貫木屋墓 [玉木 1989: p. 213]、木造家型墓 [加藤 2010: pp. 217-220] などとよばれている墓があるが、私は、これらの墓を含めて「木槨墓」という型式を設置したい。これは、自然洞窟や掘込型の墓室内または地上に、木槨（木造建物）を建ててその中に厨子や遺骨を納める型式で、沖縄の墓と初期の王陵の関係を理解する上で必要である。

以上の沖縄の伝統的な墓制の変遷については、おおづかみには、洞穴墓・岩穴囲込墓 → 掘込墓 → 破風墓・平葺墓 → 亀甲墓 → 平地式の墓として考えられている [上江州 1982、小川 1987、玉木 1989]。琉球の王陵も、こうした民俗学的な墓の分類と変遷のなかに位置づけられてきた。しかし、各型式の墓のなかで典型的で大規模でそして出現年代が最も古いのが王陵である。王陵は、沖縄の墓の一つではなく、祖型でありモデルとして位置づけるべきだと考える。

1-2 中山王陵の分類と編年

琉球王国（中山）では、英祖・察度・第一尚氏・第二尚氏の4王統が交代し、それぞれの王陵（陵墓）¹⁾が造営された。そのうち下記の4王陵については、墓室内部・全体構造・改修の履歴などが把握できる。

浦添ようどれ（浦添市）。英祖王陵といわれている。発掘調査で [浦添市教委 2001・2005a・2007]、造営と改修の経過が明らかになった [浦添市教委 2005b、安里 2006a・2008]。咸淳9年（1273 癸酉）に造営されたあと、尚巴志王代（1422-39）と泰昌元年（1620）に大改修され、1945年の沖縄戦で壊滅した。この造営と改修を基準に、第Ⅰ期（初期浦添ようどれ）：1273年～15世紀前半、第Ⅱ期：15世紀前半～1620年、第Ⅲ期：1620年～1945年に時期区分できる。

天山ようどれ²⁾（那覇市首里）。正統4年（1439）に死去した第一尚氏の尚巴志王を葬った天齋山と考えられている [東恩納 1950: pp. 118-119]。第一尚氏滅亡後は、第二尚氏王族の北谷家の墓として使用され、「天山御墓」とよばれた。沖縄戦で壊滅したが、15世紀に漂着した朝鮮人の見聞談や、首里古地図、大正13年（1924）の伊東忠太のスケッチ、発掘調査 [安里・盛本 1984] などから、往時の姿を知ることができる [安里 2006a: pp. 79-82]。

首里玉御殿（那覇市首里）。第二尚氏王陵。「玉陵」の名称で世界遺産に登録されているが、王府の行政文書では「玉御殿」と表記するのが一般的だとする指摘 [高良倉吉 1989a: pp. 172] にしたがう。弘治14年（1501）頃に尚真王が造営した。16世紀の首里玉御殿については、漂着朝鮮人の見聞談や冊封使録から知ることができる。沖縄戦で大破したが、戦後、墓室調査と修復が行われた [重要文化財玉陵復原修理委員会 1977]。造営



浦添ようどれ



天山ようどれ (首里古地図: 沖縄県立図書館蔵)



首里玉御殿 (玉陵)



伊是名玉御殿 (新里涼子撮影)

図2 中山王陵の墓室

以後も大規模な改修はなく初期の外観をほぼ保っている³⁾。

伊是名玉御殿(伊是名島)。第二尚氏初代尚円王の姉とその親族を葬った陵墓で、尚真王代(1477~1526)の造営と伝えられる。造営当初は、瓦葺建物内に木槨(板葺建物)が建てられた二重構造だったという⁴⁾。その後大破したために康熙27年(1688)に、改築されてほぼ現在の形になった。改築以後を「近世伊是名玉御殿」と呼ぶことにする。2005年調査[首里城研究会2006]で近世伊是名玉御殿の全体像が明らかになった。

以上の中山王陵は、それぞれの造営・改修時期の形態を基準にしてつぎの4型式に分類・編年できる。この分類と編年についての詳論は別稿⁵⁾に譲り、ここでは概要を説明する。

① 初期浦添ようどれ(木槨墓)。人力による大きな掘込型の墓室内⁶⁾に木槨(瓦葺建物)を建て、その中に漆塗り高床建物形板厨子⁷⁾を安置する。墓室は閉塞せずに開放されている。火葬と洗骨が行われている。② 天山ようどれ・第Ⅱ期浦添ようどれ(掘込墓)。大きな掘込型の墓室を石積で閉塞してアーチ形墓口を設けて板戸を付ける。墓室内に青石(輝緑岩)製の基壇宮殿形石厨子⁸⁾を安置する。墓域全体を高い石牆で囲い込んで門(おそらくアーチ門)を設ける。墓室前面と墓室内を漆喰化粧する。洗骨が主流になる。③ 首里玉御殿(破風墓)。掘込型の墓室を石積で閉塞してアーチ形墓口を設けて板戸を付ける。墓室前面を漆喰化粧する。墓室内に青石製の基壇宮殿形石厨子や琉球石灰岩製家形石厨子を安置し、墓室外観を切妻の破風建物形に造形する。墓口には板戸を付け、墓室前面

沖縄の墓の諸要素		火葬	板厨子	木槨	掘込墓室	洗骨	墓室閉塞	板戸	漆喰化粧	石厨子	石牆囲い	破風屋根	平地構築	焼物厨子
1273年造営	初期浦添ようどれ	●	●	●	●	●								
1429年頃造営	天山ようどれ				●	●	●	●	●	●	●			
15世紀前半改修	第Ⅱ期浦添ようどれ				●	●	●	●	●	●	●			
1501年頃造営	首里玉御殿				●	●	●	●	●	●	●	●		
1688年改築	近世伊是名玉御殿					●	●	●	●	●	●	●	●	●

図3 王陵の諸要素

に高い基壇と欄干を設置する。墓域を高い石牆で囲い込みアーチ状楣門を設け板戸をつける。洗骨のみになる。④ 近世伊是名玉御殿（平地式破風墓）。切妻破風形の平地式石造建物で、方形の墓口に板戸をつける。建物内外面を漆喰化粧する。墓域をサンゴ石積み石牆で囲い込みアーチ門を設ける。墓室内には石厨子や焼物厨子が安置されている。

以上の中山王陵の分類と編年は、沖縄の墓の祖型・諸要素の出現過程として整理できる（図3）。初期浦添ようどりは、木槨墓の祖型であり、掘込型墓室・木槨・板厨子・火葬・洗骨などが確認できる最も古い事例である。天山ようどれと第Ⅱ期浦添ようどりは、掘込墓や板門墓の祖型であり、両王陵から墓室閉塞・板戸・漆喰化粧・石厨子・石牆囲いが始まる。石牆囲いは、墓庭を囲う袖石垣の原型だと考えられる。首里玉御殿は破風墓の祖型、近世伊是名玉御殿は平地式破風墓の祖型である。

2. 墓と厨子の祖型としての中山王陵

2-1 中山王陵以後の墓型式

つぎに中山王陵以後の墓型式の変遷をたどることにしよう。

最初に中山王陵（浦添ようどれ）が造営された13世紀後半頃の沖縄では、土壙墓、洞穴墓、岩穴囲込墓などの墓制が行われていたと考えられる。土葬の事例には12～13世紀の伊波後原遺跡の土壙墓〔当真1975〕、14世紀の浦添グスクの土壙墓〔浦添市教委1986〕がある。洞穴墓は沖縄各地に見られ、発生がきわめて古い〔名嘉真1972: pp. 658-659〕といわれているが、造営年代が確かなものはほとんどない。ここでは、康熙39年（1700）造営の野国総官墓（嘉手納町）〔嘉手納町2006〕をあげておく。後述の洞穴墓や岩穴囲込墓の発掘例からみて、これらの墓はグスク時代から近世に使用されていたと思われる。

岩穴囲込墓は、「無数にみる事が出来る」〔名嘉真1972: p. 660〕といわれている。造営年代などが判明する事例をいくつかあげると、14～16世紀前葉のおみなり御墓（南城市稲福）〔小川1987: pp. 213-214〕、15～16世紀の銘苅古墓群南B地区4号墓・47号墓下位、同じく16～17世紀前半の47号墓中位〔那覇市2007〕、1649年造営のはな崎墓〔上江州1982〕、18世紀中葉の伊波中門門中墓（石川市）〔沖縄県教委1987〕などがある。私が確認した南城市山里の古墓は、18世紀前半のボージャー厨子⁹⁾1基が安置された岩穴囲込墓であった（図1）。

てだがあなの王宮

世紀	13	14	15	16	17	18	19	20
土壌墓	12c~13c 伊波後原遺跡							
	14c 浦添グスク							
洞穴墓	14c~16c前葉 おみなり御墓(田名家)							
岩穴囲込墓	15c~16c 銘苅古墓群南B地区4号・47号 墓下位							
	16c~17c前半 銘苅古墓群南B地区47号墓中位							
	1649 はな崎墓(上江州家)							
	1700 野国総官墓							
	18c前半 山里の古墓							
	18c中葉 伊波中門門中墓							
木槨墓	1273 初期浦添ようどれ							
	15c 百按司墓							
掘込墓	1439頃 天山ようどれ							
	15c前期 第Ⅱ期浦添ようどれ							
	1494 小祿墓							
	16世紀中葉 儀間御墓(田名家)							
	17c~18c 銘苅古墓群							
	1660頃 小港墓(上江州家)							
	17c ウミナイビヌ墓(比嘉門中)							
	1865 比嘉門中2号墓							
	1882 比嘉門中1号墓							
破風墓	1501頃 首里玉御殿							
平葺墓	1525 上里墓							
	1670 池城墓							
	1822 伊祖の入れ御拝領墓							
平地式破風墓	1688 近世伊是名玉御殿							
	1699 崎原古墓							
	1764 佐敷ようどれ							
亀甲墓	1684 幸地腹赤比儀腹門中墓(初期)							
	1687 伊江家の墓							
	17c~18c 銘苅古墓群							
	1701 けんさく原墓(上江州家)							
	1831 美里川墓(上江州家)							
	1883 與久田門中墓							

図4 沖縄の王陵と墓の編年

洞穴墓や岩穴囲込墓が広くつくられているなかで、中山王陵をモデルにした墓を最初に造営したのは、大型グスクの寨官や首里王府の官人層であった。

初期浦添ようどれ(木槨墓)に次いで古い木槨墓が、百按司墓(今帰仁村)である。北山王統ないしは第一尚氏系王族の北山監守の墓群といわれている。自然洞窟の中に建てられた木槨(板葺建物)内に、多数の漆塗りの高床建物形板厨子が安置されていた。やや新しい型式の厨子に弘治13年(1500)銘があるので、造営は15世紀にさかのぼる。現在は石積で墓室を囲っているが、これは万暦5年(1577)に設置されたもので[金関1978: pp. 244]、造営当初は初期浦添ようどれのように開放された洞窟内に木槨が建てられていたと考えられる。

天山ようどれ・第Ⅱ期浦添ようどれ(掘込墓)のつぎに年代の確かな掘込墓は、小祿墓(宜野湾市)である。王府官人「おろく大やくもい」の墓で、弘治7年(1494)銘の青石製石厨子が安置されている[沖縄県教委1984: pp. 102-103]。同じく王府官人層の田名家

の墓は、前述した大城按司時代～在野時代（14～16世紀前葉）の岩穴囲込墓（おみなり御墓）から、王府官人に登用された後の16世紀中葉に掘込墓（儀間御墓）を造営したと考えられている〔小川 1987: pp. 213-214〕。

首里玉御殿（破風墓）をモデルにしたと考えられる墓に、尚真王養父で尚清王母の外祖父と伝えられる花城親方の墓（南城市具志頭）がある（図1）。残念ながら確実な造営年代は不明である。同じく首里玉御殿をモデルにしたと考えられている平葺墓が、王府官人の「たくし大やくもい」が葬られた、嘉靖4年（1525）造営の上里墓（那覇市）〔大嶺薫 1961〕である。「玉陵に酷似した点がある」〔小川 1987: p. 215〕と指摘されている。王府官人の「さき山大やくもい」を葬った池城墓（今帰仁村）は、康熙9年（1670）の造営で〔平敷 1995: pp. 282-284〕、片屋根の平葺墓である。

2-2 17世紀後半以後の墓型式

17世紀後半～18世紀初期は、墓造営の歴史的転換期だったと指摘されている。士族・百姓の身分制の確立にともない17世紀後半には分家の墓が次々と造営され、18世紀初期には首里の都市整備のために首里にあった墓が周辺地域へ移転させられていく時期であった〔高良 1989b、田名 2004〕。この時期に一般士族層へ掘込墓が普及していくが、破風墓や平葺墓は一部の有力士族層に限られていたようである。

首里系・泊系士族の墓地と考えられている銘刈古墓群（那覇市）では、発掘調査で、15～20世紀前半までの340基の墓が確認された。型式が判明した墓は、岩穴囲込墓10基、掘込墓237基、平葺墓3基、破風墓27基、亀甲墓12基であった。ほとんどは17～18世紀の掘込墓で、亀甲墓などは17～18世紀と報告されている〔那覇市 2007〕。久米島の有力士着層で王府士族の上江州家の墓は、1649年造営の岩穴囲込墓（はな崎墓）→1660年頃造営の掘込墓（小港墓）→1701年造営の初期の亀甲墓（けんさく原墓）→1831年造営の地上式亀甲墓（美里川墓）と変遷した〔上江州 1982・2007〕。

一部の農民層でも早くから掘込墓・平葺墓・亀甲墓を造営していた。浦添間切農民の比嘉門中では、17世紀に掘込墓（ウミナイビヌ墓）を造営しており、同治4年（1865）と光緒8年（1882）にも掘込墓（2号墓と1号墓）を造営した〔安里・新里 2006: pp. 1-47〕。同じく浦添間切の農民が、浦添御殿からの拝領ではあるが、道光2年（1822）に平葺墓（伊祖の入れ御拝領墓）〔安里 1997〕を造営している。近世伊是名玉御殿と同型式の平地式破風墓の事例には、康熙38年（1699）造営の崎原古墓〔当真・上原・平良 1985〕（西原町）がある¹⁰。乾隆29年（1764）に改築された佐敷ようどれは、平地式で切妻側面が唐破風形だが、これは平地式破風墓の変型として位置づけられる。糸満市の幸地腹赤比儀腹門中墓は、康熙23年（1684）に造営された当初は亀甲墓だった〔金城善 2004〕。與久田門中墓（読谷村）は大規模な亀甲墓だが、その造営は明治16年（1883）である〔名嘉真・泉川 1988〕。

以上に紹介した事例を整理すると（図4）、王陵と沖縄の墓型式の関係はつぎのように説明できる。それまで土壙墓や洞穴墓・岩穴囲込墓などを使用していた沖縄社会に、圧



図5 主な厨子型式 (6~10は、近世の士族・農民層の厨子)

倒的な存在の中山王陵が出現し、王統交代とともに新形式の王陵が登場した。これを契機に、地方の支配層や王府官人層が王陵をモデルにした木槨墓・掘込墓・平葺墓・破風墓を造営する。これらの各型式の墓が併存しながら士族層や農民層に普及していったと考えることができる。

2-3 厨子の祖型とモデル

墓の型式だけでなく、厨子の祖型も王陵の厨子であった。沖縄の厨子は、上江州 [上江州 1980: p.360] によって体系的に分類・編年されている。各型式の厨子で最初に出現したのが王陵の厨子で、これを祖型にして各型式の厨子が生まれたと考えられる。王陵の厨子を直接の祖型としない厨子は、ボージャ厨子・マンガン釉甕形厨子・赤焼御殿形厨子で、これらの厨子は、当初から庶民用として製作されている。

王陵の厨子は、出現当初から建物形だが、そのモデルは、拙稿 [安里 2006a: pp.38-45] で論じたように、首里城などの大型グスクの正殿であった。大型グスクの正殿は、大型掘立柱建物¹¹⁾から 14 世紀に基壇礎石建物へと変化した。13~14 世紀の王陵の厨子も正殿と平行に変化を遂げている。初期浦添ようどれの漆塗り高床建物形板厨子 [安里・宮里・木下 2001、浦添市教委 2005a: pp.113-114] から第Ⅱ期浦添ようどれ・天山ようどれの青石 (輝緑岩) 製の基壇宮殿形石厨子に変化する。この変化は、大型グスクの大型掘立柱建物から基壇礎石建物への変化に対応している。

つまり、王陵の厨子のモデルは首里城などの大型グスクの正殿だったと考えられる。そして、王陵の厨子を祖型にして、一般に使用されている琉球石灰岩製や焼物の家形厨子や御殿形厨子が生まれてきたと考えられる。

近世の厨子でも、首里城正殿がモデルだったことが確認できる(図6)。御殿形厨子には、首里城正殿の特徴である外観二層構造と唐破風を模倣したものが多い。円筒形の庇付マンガン釉甕形厨子(図5-9)は、一見すると建物形には見えないが、蓋は二層屋根で、身にも瓦葺き屋根がめぐっている。そして、「マド」とよばれる身正面の飾りは、首里城正殿の唐破風を忠実に表現したもの(図6上)から、型式化したものまである。唐破風を表現したマド飾りはボージャー厨子にもみることができる。



図6 首里城正殿の唐破風・二層屋根を模した厨子

3. てだがあなの王宮

3-1 沖縄の墓はなぜ建物形に発達したのか

ここまで、沖縄の墓と厨子の祖型が王陵とその厨子であること、厨子は首里城などの大型グスクの正殿をモデルにした建物形だったことを、具体的事例をあげて説明してきた。ここで、本稿のはじめに提起した問題の一つ、沖縄の墓はなぜ建物形へと発達したのかについて、墓と厨子の祖型としての中山王陵から考えることにしよう。

沖縄の墓が建物化していくことは、すでに高良倉吉が指摘している[高良1989b: p.42]。破風墓以後の墓が建物化することは視覚的にもよく理解できるが、建物化は破風墓以前から始まっていた。初期浦添ようどれには、墓室内に木槨(瓦葺建物)が建てられ、その中に漆塗り高床建物形板厨子が納められていた。また、第Ⅱ期浦添ようどれ・天山ようどれの掘込墓室にも、基壇宮殿形石厨子が安置されていた。木槨・高床建物形板厨子・基壇宮殿形石厨子からすると、首里玉御殿のような破風墓は、それ以前の木槨墓や掘込墓の墓室内に存在した木槨や厨子の形が、墓室外観にまで拡大されて全体が宮殿形に造形されたものと理解できる。

宮殿形の要素は、亀甲墓にも見ることができる。亀甲墓の形態上の特徴は亀甲形の屋根部にあるが、もう一つの特徴として、墓正面の「眉」が唐破風形に曲線



図7 亀甲墓と首里城正殿唐破風

てだがあなの王宮

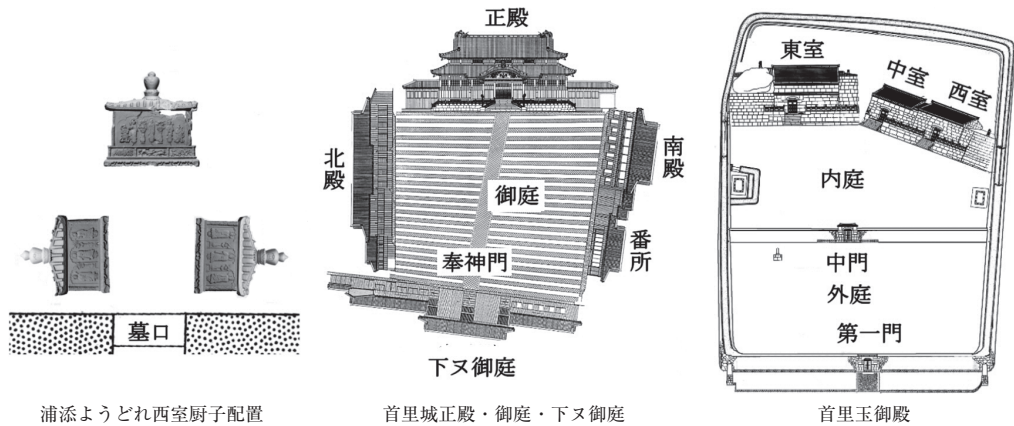


図8 首里城正殿・御庭と浦添ようどれ西室・首里玉御殿

造形されていることがあげられる。亀甲墓の「眉」の独特な曲線も、首里城正殿の唐破風をモデルにしていたと考えられる(図7)。

王の遺骨を納める施設の形を、首里城などの大型グスクの正殿をモデルにしたのは、厨子の形や墓室外観だけではない。第Ⅱ期浦添ようどれ西室の3基の大型石厨子の配置が、首里城正殿と同一構造になっていることは拙論で指摘した[安里 2006a, pp. 58-59](図8)。同様なことは首里玉御殿にも指摘できる。首里玉御殿の東室は、国王の厨子を安置する墓室だが、これも造営当時の首里城正殿(板葺き外観2層構造)をモデルにしている。東室は、正殿と同様に、板葺きを表現した磚瓦敷き屋根の外観切妻2層建物で、王権を象徴する高い基壇と欄干が取り付けられている。

首里玉御殿では、さらに全体構造までも首里城の中核域と同一構造になっている。首里城の御庭を囲む区域の外には奉神門を挟んで、下ノ御庭がある。御庭は、儀式を行う聖域空間だが、下ノ御庭は一般士族が執務を行う行政空間になっている。首里玉御殿も、中門と石牆で内庭と外庭に仕切り、内庭には聖域空間に敷くエダサンゴ砂利を敷き詰め、外庭には海砂を敷いて区別している。大型グスクの正殿をモデルにした王陵の造営は、首里玉御殿で頂点に達したといえる。

3-2 白い王陵

最後に、なぜ洞窟に墓がつくられたのか、そしてなぜ沖縄の墓は漆喰で白化粧されているのかを、沖縄の墓の祖型としての王陵から考えたい。私は、『琉球の王権とグスク』[安里 2006a]で、浦添ようどれが、琉球王権思想である太陽子思想(てだこ思想)やニライカナイ信仰にもとづいて、ニライカナイのてだが穴に建てられた死後の王宮として設計されたことを論じた。本稿では、拙論に補足を加えながら、洞窟と漆喰化粧の意味について考えることにしたい。

太陽子思想とは、中山王統の鼻祖の一人である英祖王を、太陽神の子あるいは太陽神

と同化した天とみなしたうえで、第二尚氏王統を太陽神の末裔に位置づける思想である¹²⁾。この王権思想は、ニライカナイ信仰と不可分に結びついていた。他界であるニライカナイは、久高島の東方彼方の地底にある太陽神の居所で、そこには太陽が生まれ出る「てだが穴」（太陽の穴）があると信じられていた〔中本 1990: pp. 872-897〕。太陽は、東方の穴から現れて西方の穴へ消えていく〔平山 1987: p. 155〕、あるいは太陽崖（テダバンタ）に沈んでのち、地底をくぐりぬけててが穴から再生する〔比嘉 1991: pp. 54-60〕、などと考えられている。

ニライカナイのてだが穴は、中山王権の思想からすると、太陽神としての王が生まれ出る穴であり、亡き王が新たな王として復活する穴ということになる。この思想を具現化したのが、第Ⅱ期浦添ようどれで、ニライカナイのてだが穴にある死後の王宮として設計されていたと考えられる。

浦添ようどれの入口には、久高島に向かって地底にもぐるかように口をあけたトンネル（暗しん御門）がある。トンネルをぬけると二番庭に出る。ここからニライカナイの世界になるのだろう。二番庭は琉球石灰岩の石牆で囲まれているが、琉球石灰岩は削ると真っ白い石肌があらわれるのが特徴だ。造営当初の二番庭は、琉球石灰岩の白い石牆で囲まれ、床面にも白い石粉を敷いた眩しい白い空間だったことが、復元されたばかりの浦添ようどれから読みとれる。奥へ進んで一番庭に入ると、石牆と石粉敷きだけでなく墓室前面も漆喰で白化粧されており、さらに眩しい白い空間になる。ニライカナイが太陽が照り輝く「白い世界」としてイメージされていたと考えられる。

墓室内も徹底して白い空間に仕上げられていた（図9）。琉球石灰岩を掘り込んだ墓室は、白い岩肌に囲まれ、床面にも白い石粉を敷き詰め、石積も漆喰で白化粧する。その中に3基の宮殿型石厨子が、首里城の正殿・御庭の建物配置と同様に設置されている。このような洞窟状の白い墓室は、ニライカナイのてだが穴として設計されていたと考えられる。造営当初の第Ⅱ期浦添ようどれは、まさに白い世界であるニライカナイのてだが穴に建つ王宮をイメージして造営された「白い王陵」だったといえる。



図9 浦添ようどれ墓室の石厨子（西室）

首里玉御殿や近世伊是名玉御殿も「白い王陵」だった。造営当初の首里玉御殿は、琉球石灰岩の白い石牆で囲まれ、白いエダサンゴ砂利と海砂が敷かれ、3棟の墓室は漆喰で白化粧されていた。近世伊是名玉御殿も、サンゴ石積みの白い石牆で囲み、石造建物を漆喰で全面的に白く塗り上げ、墓室内は、床面に白いエダサンゴ砂利を敷き詰め、壁面を漆喰白化粧し、天井も胡粉と思われる白色塗料で塗り上げるなど徹底して白い空間に仕上げている〔安里 2006b〕。

沖縄の墓は、なぜ洞窟に造られたのか、なぜ漆喰で白化粧したのか。墓と厨子の祖型としての王陵からみると、「白い世界」としてイメージしたニライカナイのてだが穴に建

つ王宮にみたてる思想に由来していると考える。

むすびに

本稿では、沖縄の墓が洞窟内に造られ、これが建物形へと発達した理由や、墓を漆喰で白化粧することの意味、そして洗骨した遺骨を納める厨子も建物形であることの意味について、中山王陵との関係から考えてきた。中山王陵は、これまで沖縄の墓の一つに分類されてきたが、これを沖縄の墓と厨子の祖型に位置づけることで、沖縄の墓や厨子に込められた本源的な意味を分析できると考えた。そのために本稿では、中山王陵が墓と厨子の祖型であることを裏付ける作業に紙数の大半を割いた。墓の造営年代資料については、まだまだ収集する余地があるが、中山王陵は、沖縄の墓と厨子の祖型であり、首里城などの大型グスクの正殿をモデルにしていたことは確認できたのではないかと考えている。

問題は、中山王陵から分析した結果の評価であろう。考古学的方法で分析した結果が、これまでの民俗学やオモロ研究などの理解と整合しうるのかという点である。ここでは、ニライカナイを「白い世界」としてとらえた私の結論と、ニライカナイを「青の世界」と理解した仲松弥秀説との関係を取りあげたい。

仲松は、奥武島などの「奥武」地名を太古の墓所に由来すると考え、「奥武」をオー(青)と解釈して、死者の往く世界つまりニライカナイを草木が茂る「青の世界」として理解した[仲松 1975・1977]。私と仲松の方法は、考古学と民俗地理学というように扱う材料も分析方法も異なっている。また、分析対象も中山王権がイメージしたニライカナイにたいし民衆が想像したニライカナイという違いもある。結論が一致しないのは当然かもしれない。あるいは、歴史の深層世界と王権出現後の上部世界の違いの反映かもしれない。いずれにしても、同時代のモノに即して考えを詰めていくと、沖縄の王陵や墓は、他界を「白い世界」とイメージして造営されたという結論にいたるのである。

注

- 1) ここでいう王陵とは、王墓だけでなく王族墓を含めた概念である。第二尚氏王統では王族の陵墓を「玉御殿」と「御墓」に区別していたが、この「玉御殿」に相当するのがここでいう王陵である。
- 2) 伊波普猷は「天山のようどれ」とよんでいる[伊波 1961: pp. 306-307]。古くからそのように呼ばれていたのか定かではないが、英祖王陵の浦添ようどれや第一尚氏王陵の一つが「佐敷ようどれ」と呼ばれていることから、天山ようどれが第一尚氏王陵の名称として適切だと考えられる。「天山御墓」の「御墓」は、第二尚氏王陵の「玉御殿」と区別した北谷家の墓としての呼称である。
- 3) 首里玉御殿は、造営後から近世にかけて、板戸を石扉に改修したり、厨子の再配置や追加などがあったが、外観はほぼ16世紀の形状を保っていると考えられる。
- 4) 『向姓家譜』(銘苺家)。
- 5) 琉球王陵の分類と編年については、2010年7月2日に高麗大学で開催された関西大学文化交

渉学教育研究拠点企画学術フォーラム「陵墓からみた東アジア諸国の位相——朝鮮王陵とその周縁」の報告論文集で詳論する予定である。

- 6) 浦添ようどれの墓室は、自然洞窟を利用したと考えられてきた。しかし、墓室の平面形は計画的で、天井も壁面も人工的に平坦面に仕上げられ、表面には人力掘削された多数の鑿跡が残っている。その一方で自然洞窟特有の溶食による鍾乳石や流華石などは確認できない。小規模の自然洞窟を利用した可能性までは否定できないが、少なくともその痕跡を全く残さないほどに人力掘削された掘込型の墓室である。
- 7) これまで「屋根蓋付き唐櫃形板厨子」とよんできたが、唐櫃形よりも高床建物形にその特徴があると考えられるので、「高床建物形板厨子」とよぶことにしたい。
- 8) これまで、「基壇建物形石厨子」または「基壇宮殿形石厨子」と呼んできたが、王権を象徴する基壇の意義にそった後者の名称に統一したい。
- 9) ボージャー厨子の安里・新里編年〔安里・新里 2006〕にあてはめると、蓋Ⅲ a 式 (1710~40 年)、身Ⅲ a 式 (1700~1800 年) で、蓋身の年代が重なる 1710~1740 年の厨子になる。
- 10) 崎原古墓が破風墓である根拠が報告書でははっきりしないが、ここでは報告書にもとづいて「破風墓」として扱う。
- 11) これまで大型グスクの正殿を「掘立柱建物」とよんできたが、一般の掘立柱建物と区別するために、「大型掘立柱建物」とよぶことにしたい。
- 12) 太陽子思想については、比嘉実 1991、外間守善 2006、知名定寛 1994 を参照。

引用文献

- 安里嗣淳・盛本勲 (1984) 「天山陵跡調査の概略」『紀要』第 1 号、沖縄県教育委員会文化課、pp. 13-34、沖縄。
- 安里 進 (1997) 『伊祖の入れ御拝領墓の厨子甕と被葬者——近世墓の考古学的調査による家族復元——』浦添市教育委員会、沖縄。
- 安里 進 (2006a) 『琉球の王権とグスク』日本史リブレット 42、山川出版社、東京。
- 安里 進 (2006b) 「伊是名玉御殿の考古学的調査」『首里城研究』No. 9、首里城研究会、pp. 30-46、沖縄。
- 安里 進 (2008) 「英祖王陵浦添ようどれの造営と改修の年代」『第 11 回琉中歴史関係国際学術会議論文集』琉球中国関係国際学術会議、pp. 197-216、沖縄。
- 安里 進 (2010) 「王のグスクと王陵」『沖縄県史 各論編 第三巻 古琉球』沖縄県教育委員会、pp. 134-153、沖縄。
- 安里進・新里まゆみ (2006) 「比嘉門中墓の家族史——家族の数だけ歴史がある——」浦添市教育委員会、pp. 1-47、沖縄。
- 安里進・宮里信勇・木下秋海 (2001) 「琉球国中山王陵・浦添ようどれ出土の漆芸関係資料——唐櫃形漆龕の復元」『尚王家と琉球の美展』MOA 美術館、pp. 119-122、静岡。
- 伊波普猷 (1961) 『伊波普猷選集 上巻』沖縄タイムス社、沖縄。
- 上江州均 (1980) 「沖縄の厨子甕」『日本民族文化とその周辺 歴史・民俗篇』国分直一博士古希記念論集編纂委員会編、新日本教育図書、pp. 341-374、山口。
- 上江州均 (1982) 『沖縄の暮らしと民具』慶友社、東京。
- 上江州均 (2007) 『久米島の民俗文化——沖縄民俗誌Ⅱ——』榕樹書林、沖縄。
- 浦添市教育委員会 (1986) 『浦添市史 第 6 巻資料編 5、自然・考古・産業・歌謡』沖縄。
- 浦添市教育委員会 (2001) 『浦添ようどれⅠ 石積遺構編』沖縄。
- 浦添市教育委員会 (2005a) 『浦添ようどれⅡ 瓦溜り遺構編』沖縄。
- 浦添市教育委員会 (2005b) 『浦添ようどれの石厨子と遺骨——調査の中間報告——』沖縄。
- 浦添市教育委員会 (2007) 『浦添ようどれⅢ 金属工房編』沖縄。
- 大嶺 薫 (1961) 「上里墓調査報告」『文化財要覧一九六一年版』琉球政府文化財保護委員会、

- pp. 77-92、沖縄。
- 小川 徹 (1987) 『近世沖縄の民俗史』 弘文堂、東京。
- 沖縄県教育委員会 (1984) 『沖縄の文化財』 沖縄。
- 沖縄県教育委員会 (1987) 『古我知原内古墓——沖縄自動車道(石川～那覇間) 建設工事に伴う緊急発掘調査報告書(7)——』 沖縄。
- 嘉手納町 (2006) 『野国總官』 野国總官甘藷伝来 400 年祭実行委員会、沖縄。
- 加藤正春 (2010) 『奄美沖縄の火葬と葬墓制』 榕樹書林、沖縄。
- 金城陸弘 (1982) 「沖縄の墓——その分類と推移——」 『青い海』 117 号、青い海社、pp. 26-35、沖縄。
- 金城 善 (2004) 「糸満の門中墓」 『墓からわかる家族の歴史 近世墓シンポジウム報告書』 浦添市教育委員会、pp. 35-39、沖縄。
- 金関丈夫 (1978) 『琉球民俗誌』 法政大学出版局、東京。
- 重要文化財玉陵復原修理委員会 (1977) 『重要文化財玉陵復原修理工事報告書』 沖縄。
- 首里城研究会 (2006) 『首里城研究 特集 伊是名玉御殿調査報告』 沖縄。
- 玉木順彦 (1989) 「史料に見る沖縄の葬墓」 『シンポジウム南島の墓 沖縄の葬制・墓制』 沖縄出版、pp. 206-236、沖縄。
- 高良倉吉 (1989a) 『琉球王国史の課題』 ひるぎ社、沖縄。
- 高良倉吉 (1989b) 「歴史としての墓」 『シンポジウム南島の墓 沖縄の葬制・墓制』 沖縄出版、pp. 40-45、沖縄。
- 田名真之 (2004) 「近世の士族の墓」 『墓からわかる家族の歴史 近世墓シンポジウム報告書』 浦添市教育委員会、pp. 21-26、沖縄。
- 知名定寛 (1994) 『沖縄仏教史の研究』 榕樹社、沖縄。
- 当真嗣一 (1975) 「石川市伊波後原遺跡調査概報」 『南島考古』 第 4 号、沖縄考古学会、pp. 48-70、沖縄。
- 当真嗣一・上原静・平良利夫 (1985) 「西原町崎原所在の古墓の調査」 『紀要』 第 2 号、沖縄県教育委員会文化課、pp. 69-84、沖縄。
- 名嘉真宜勝 (1972) 「墓制」 『沖縄県史 第 22 卷各論編 10 民俗 1』 琉球政府、pp. 654-694、沖縄。
- 名嘉真宜勝・泉川信一 1988 「奥久田門中墓調査報告」 『読谷村立歴史民俗資料館紀要』 第 12 号、読谷村立歴史民俗資料館、pp. 29-92、沖縄。
- 仲松弥秀 (1975) 『神と村』 伝統と現代社、東京。
- 仲松弥秀 (1977) 『古層の村 沖縄民俗文化論』 タイムス選書 4、沖縄タイムス社、沖縄。
- 中本正智 (1990) 『日本列島言語史の研究』 大修館書店、東京。
- 那覇市教育委員会 (2007) 『銘苺古墓群——重要遺跡確認調査報告——』 沖縄。
- 東恩納寛惇 (1950) 『南島風土記』 沖縄郷土文化研究会・南島文化資料研究室、沖縄。
- 東恩納寛惇 (1956) 「亀甲式墓と曾得魯——伊江王子家の墓——」 『琉球新報』 1 月 13 日～14 日、『東恩納寛惇全集 8』 所収、第一書房、pp. 285-288、東京。
- 比嘉 実 (1991) 『古琉球の思想』 沖縄タイムス選書 5、沖縄タイムス社、沖縄。
- 平敷令治 (1995) 『沖縄の祖先祭祀』 第一書房、東京。
- 平山良明 (1987) 「太陽穴について」 『おもろさうし精華抄』 おもろ研究会、pp. 150-157、沖縄。
- 外間守善 (2006) 「琉球王朝の成立と初期王権」 『古代王権の誕生 I 東アジア編』 角田文衛・上田正昭監修、角川書店、pp. 122-142、東京。